全国の園長先生に
無料でお届けしています

子どものよりよい育ちをともに考える

これからの幼児教育

2022 Winter
冬

特集

「しくみ」で積み上げ、質を高める幼保小接続

インタビュー
「架け橋プログラム」識者に聞く
滋賀県副知事 大杉住子

自治体事例紹介
神奈川県横浜市こども青少年局

小学校事例紹介
横浜市立恩田小学校（神奈川県）

データ紹介1
アジア8か国の調査から「レジリエンス」を考える
解説／チャイルド・リサーチ・ネット所長 榊原洋一

データ紹介2
「幼児の生活アンケート」から保護者の変化を探る
解説／東京家政大学大学院客員教授 佐藤暁子

ベネッセ教育総合研究所

CONTENTS

特集

1 「しくみ」で積み上げ、
質を高める幼保小接続

2 インタビュー
子どもを真ん中にして「架け橋期」の教育を実践し
一人ひとりの育ちを支える
滋賀県副知事 大杉住子

6 自治体の取り組み事例
多様な園や学校が共有・協働するしくみを整え
育ちと学びをつなぐ
神奈川県横浜市こども青少年局

10 小学校の取り組み事例
幼児期の体験をベースに一人ひとりが自己を発揮し
「自ら育つ」学校へ
横浜市立恩田小学校（神奈川県）

14 参考資料
「子ども」について語り、つながる！
園・小学校の対話の 3 ステップ

データ紹介

16 アジア8か国の調査から見えてきた
「ハッピー&レジリエント」な子どもをどう育むか
チャイルド・リサーチ・ネット所長 榊原洋一

18 「第6回幼児の生活アンケート」（2022 年3月実施）より
個々の家庭の状況を受け止め、子育ての喜びを味わえる
子育て支援・保護者支援の充実を
東京家政大学大学院客員教授 佐藤暁子

本誌をお手に取っていただき、ありがとうございます。

今号の特集は、本誌読者アンケートでも関心が高かった「幼保小接続」です。園と小学校が、ともに子どもの連続した育ちと学びを支え続けていくための「しくみ」づくりの重要性と、そこで積み重ねられている取り組みについて取材しました。園でご検討をする際のヒントの一端となれば幸いです。

「これからの幼児教育」編集部

STAFF

編集発行人／西村俊彦　発行所／（株）ベネッセコーポレーション
印刷製本／凸版印刷（株）　監修／北野幸子（神戸大学大学院教授）
企画・制作／ 仙田由紀子（ベネッセ教育総合研究所）
編集協力／（有）ペンダコ、丹羽三千代、菊池健（mananico）、神田有希子
執筆協力／二宮良太
表紙＋特集扉デザイン・イラスト協力／へんな優

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。
また、敬称略とさせていただきます。
※本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。
©Benesse Corporation 2022

「しくみ」で積み上げ、質を高める幼保小接続

幼保小の架け橋プログラムでは、子どもにかかわる大人が立場を越えて連携することで、架け橋期にふさわしい「主体的・対話的で深い学び」を実現し、一人ひとりの多様性に配慮しながらすべての子どもに学びや生活の基盤を育むことをめざしています。とはいえ、多様な地域、園・小学校がある現状では、そうした目的に対して、先生方の意識の面や、実際のしくみづくりの面などにそれぞれの課題があり、今後の展開への模索が続いているようです。

今号では、架け橋プログラムの策定にかかわった方、架け橋プログラムをもとに先進的な取り組みを行っている自治体、小学校など、園以外の立場からのお話を紹介しながら、各園における接続の次の一手を考えていきます。

Interview

子どもを真ん中にして「架け橋期」の教育を実践し一人ひとりの育ちを支える

大杉住子さん（おおすぎ・すみこ）

1997年に文部省（現・文部科学省）に入省。幼児教育、大学教育、キャリア教育など教育分野を中心に担当し、初等中等教育局教育課程課教育課程企画室長として学習指導要領改訂の中核を担う。その後、独立行政法人大学入試センター試験・研究統括補佐官を経て、文部科学省高等教育局私学部参事官、同省初等中等教育局幼児教育課長などを歴任。2022年8月より滋賀県副知事に就任。

文部科学省では幼保小の接続のあり方を見直し、幼児期からのつながりのある教育の実現を目的とした「幼保小の架け橋プログラム」を、2022年度から全国19の自治体をモデル地域として採択・推進しています。これまで幼保小接続にはどのような課題があったのか、今後、園ではどういった実践が求められるのか、文部科学省初等中等教育局の幼児教育課長として「幼保小の架け橋プログラム」の立案にかかわった大杉住子さん（現・滋賀県副知事）にお話をうかがいました。

子どもを中心に連携して高め合える恒常的なしくみが必要

――「幼保小の架け橋プログラム」がつくられた背景やねらいを教えてください。

少子化が進む中、保育や教育の「質」にこれまで以上に目が向けられています。また、2023年4月の「こども家庭庁」の創設に象徴されるように、乳幼児に関する組織のあり方は常に議論の対象となってきました。そうした社会状況下で、どのような組織体制であっても、子どもを真ん中に据え、幼児教育・保育の質を担保できるしくみづくりが必要だという認識が、前提としてありました。

加えて、要領・指針[*1]や小学校以降の学習指導要領が一体的に議論され、改訂・改定されました。その中では、幼児教育を基盤として小・中・高と、資質・能力の育成をベースに教育に一貫性をもたせることの大切さが強調されています。ただ、園や小学校の現場では、「子どもの姿」を出発点として「何をどのように学び、何ができるようになるか」を考えていく幼保小接続をどう実践したらいいか、まだまだとまどいがあるようです。長年にわたって幼保小接続の取り組みが続けられている地域もありますが、子ども同士の交流事業は活発化しても、その先になかなか進めないという状況が、幼児教育実態調査などからも浮かび上がってきます。

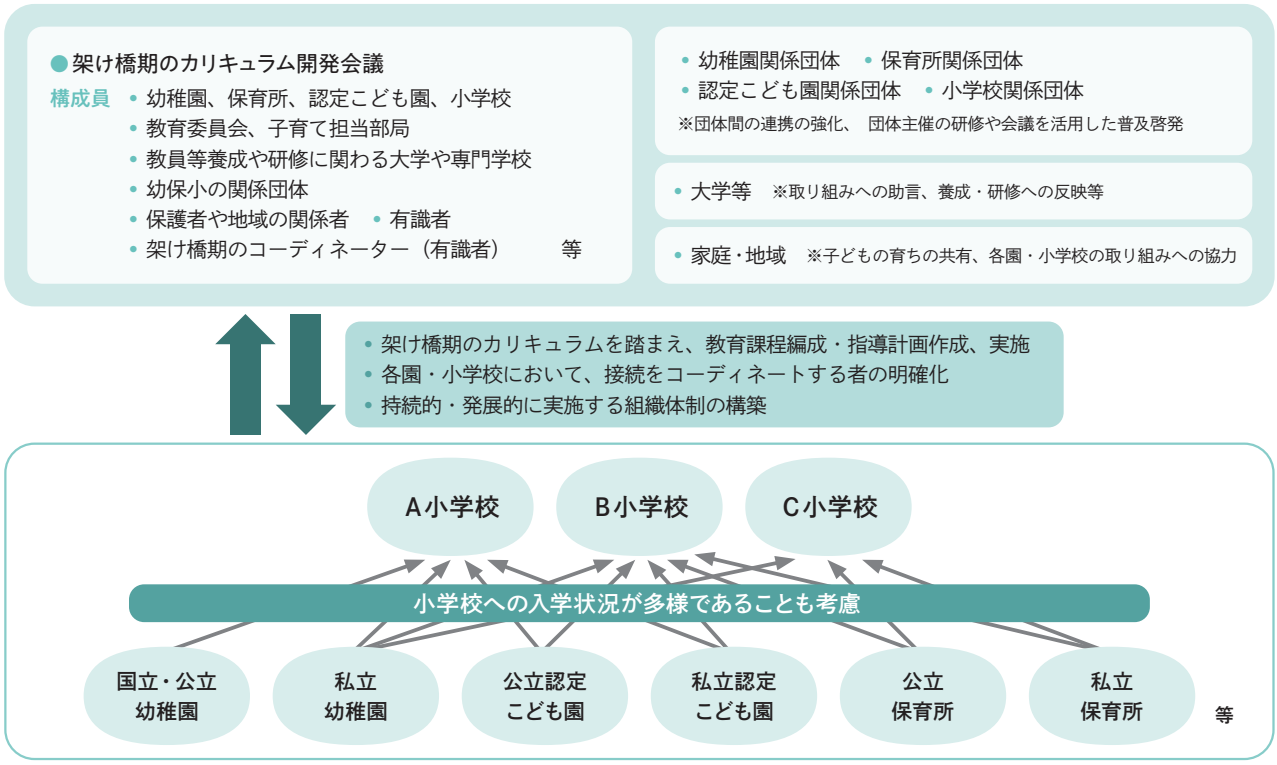
そうした状況を踏まえ、これまでの接続のあり方をもう一度見直しましょうというメッセージを込め、あえて「接続」ではなく「架け橋」という言葉を用いて、しっかりと実践につなげる工夫を検討しました。それが、「幼保小の架け橋プログラム」[*2]（以下、「架け橋プログラム」）です。つまり、「架け橋プログラム」は新しい取り組みではなく、これまで行ってきた接続の質の改善をめざすものだといえます。

――幼保小接続には、どのような課題があったのでしょうか。

幼保小の先生方は、交流事業を通して互いの信頼関係を深めてこられたと思います。しかし、そこから一歩進めて組織的なカリキュラムベースの連携を考えたときに、要領・指針の理念を具体に

＊1　要領・指針とは、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を指す。　＊2　「幼保小の架け橋プログラム」は、子どもにかかわる大人が立場を越えて連携し、架け橋期（義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間）にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人ひとりの多様性に配慮した上で、すべての子どもに学びや生活の基盤を育むことをめざしている。文部科学省では、2022年度から3か年程度を念頭に、全国的な架け橋期の教育の充実と並行して、モデル地域における実践の集中的な推進をめざすとしている。

図1 地域における体制のイメージ



※文部科学省「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」をもとに内容を抜粋して掲載。

どう落とし込めばよいかわからないことが、大きな課題となっていました。その上、近年はコロナ禍により交流事業そのものが難しくなり、幼保小の接点がなくなるケースも見られます。

園ではアプローチカリキュラム、小学校ではスタートカリキュラムの作成が進んでいますが、子ども観の共通認識の不足や互いの実践への理解不足から、例えば、スタートカリキュラムが小学校生活に慣れるためだけのものになっているなど、子どもの育ちを十分に支えられるカリキュラムではない場合もあります。互いの指導計画などを参照して理解しようと努めても、用語の違いなどから十分に読み解けないという声も聞きます。

また、接続の取り組みが充実しても、担当者が代わると形骸化してしまうなど、事業を継続するための組織的なしくみが整っていなかったことも課題といえるでしょう。

――どのような「架け橋」のあり方をめざしているのでしょうか。

「このしくみが整えば完成」という一律の考え方ではなく、子どもを中心として幼保小が連携し、語り合い、学び合い、改善し続けられる恒常的なしくみをつくることをめざしています。

具体的なしくみは地域ごとにふさわしい形があると思いますが、「架け橋プログラム」では、自治体に、幼保小の関係者や教育委員会、子育て担当部局、保護者や地域の関係者などで構成する「架け橋期のカリキュラム開発会議」の設置を提案しています（図1）。この会議では、それぞれの立場から子どもの育ちや学びについて意見や事例を出し合い、架け橋期のカリキュラムを開発したり、実施に必要な研修や教材、環境などを検討したりします。

立場の異なる多くの関係者が対話をする上で、共通の手がかりとなるのは「子どもの姿」です。例えば、公開保育・授業を一緒に参観した後、具体的な姿や場面を通して園や小学校が大切にしている理念や活動について語り合うと、相互理解が深まりやすくなります。さらに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）や各要領・指針

なども関係者の目線合わせに活用して、対話を深めてほしいと思います。

カリキュラムの開発や実践を進める上では、幼保小の教育に造詣が深く、架け橋期のカリキュラムの統括や、園・小学校への助言や支援ができるコーディネーターやファシリテーターの存在も重要です。例えば、園によって保育の理念や活動内容には違いがありますが、幼児教育アドバイザーがコーディネーターとして関係者をつないで議論をファシリテートする役割を果たしたり、小学校の指導主事と連携したりすれば、多様な考えからよりよいアイデアが生まれやすくなるでしょう。

“園における日々の試行錯誤が、教育全体を支える財産になる”

――「架け橋プログラム」を進めるにあたってのポイントを教えてください。

「架け橋プログラム」では各自治体が取り組みやすくなるように、「基礎づくり（フェーズ１）」から「改善・発展サイクルの定着（フェーズ４）」に至るまでのプロセスを、４段階のフェーズで表しました（図２）。まずは自分の自治体がどのフェーズに位置するのかを把握してほしいと思います。

図２「架け橋プログラム」の４つのフェーズ

進め方のイメージ

注：基盤づくりから改善・発展サイクルの定着に至るまでのプロセスの目安。実際には、地域の実態に応じ、各フェーズ間を行きつ戻りつしながら発展していく。

		1年目		2年目	3年目
		フェーズ1 基盤づくり	フェーズ2 検討・開発	フェーズ3 実施・検証	フェーズ4 改善・発展サイクルの定着
架け橋期のカリキュラム	方針 開発会議	●**架け橋期のカリキュラム開発会議における準備** ・構成員の選定と目指す方向性の共有 ・地域の実態の把握（開発会議は自治体に設置）	●**架け橋期のカリキュラム開発会議における検討・開発** ・方針の検討・決定、開発への支援 ・国による架け橋期の教育の質保障の枠組みとの連携開始（モデル地域対象）	●**架け橋期のカリキュラム開発会議による実施の検証** ・実施状況の把握・検証と支援 ・国による架け橋期の教育の質保障の枠組みとの連携推進（モデル地域対象）	●**持続的・発展的な架け橋期のカリキュラム開発会議の運営** ・方針の改善・発展と支援 ・国による架け橋期の教育の質保障の枠組みとの連携強化（モデル地域対象）
架け橋期のカリキュラム	具体化 園・小学校	●**接続を見通し、各園・小学校で教育課程編成・指導計画作成** ・園・小学校での活動の共有 ・子どもの交流	●**架け橋期のカリキュラムの検討・開発** ・共通の視点をもとに内容の検討・開発 ・人やものとの関わりを通じた学びを踏まえ、教材としての環境の共通性の理解 ・子どもの交流の推進	●**架け橋期のカリキュラムの実施・検証** ・園・小学校において教育課程編成・指導計画作成、実施・検証 ・人やものとの関わりを通じた学びを踏まえ、教材としての環境の活用 ・子どもの交流の充実（子どもの自発的な交流等）	●**持続的・発展的な架け橋期のカリキュラム** ・持続的・発展的な架け橋期のカリキュラム ・人やものとの関わりを通じた学びを踏まえ、教材としての環境の活用の充実 ・持続的・発展的な子どもの交流実施（子どもの自発的な交流等）
実施に必要なこと	園・小学校	●**各園・小学校での体制** ・連携窓口の明確化 ・自園・自校の先生への意識啓発と参画	●**幼保小間の体制** ・幼保小の合同会議の設置 ・相互の教育の内容や方法に関する理解の共有	●**幼保小の協働実施の体制** ・幼保小の合同会議の充実 ・相互の教育の内容や方法に関する理解の深化	●**持続可能な体制** ・幼保小の合同会議の定着 ・相互の教育の内容や方法に関する理解の改善・発展
実施に必要なこと	支援 自治体	●**連携強化への支援** ・研修の実施（幼保小合同研修等） ・自治体内の関係部局との連携	●**接続に向けた支援** ・研修の推進、研修教材の開発 ・関係機関との連携を深め、園・小学校と関係機関・関係団体との連携のコーディネート	●**幼保小の協働実施の支援** ・研修の充実、研修教材の活用 ・実施上のニーズの把握と支援 ・園・小学校と関係機関・関係団体との連携のコーディネートの充実	●**持続的・発展的な取組を支える支援の定着** ・研修の改善・発展、研修教材の改善・発展 ・必要な支援策の改善・発展 ・園・小学校と関係機関・関係団体との連携のコーディネートの改善・発展

※文部科学省「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」をもとに編集部で作成。

その際、「園・小学校の関係づくりはフェーズ２だけれど、カリキュラムづくりはフェーズ１」など、１つの自治体でも要素によってフェーズが異なる場合があることに留意してください。

フェーズを進めていく際に重要となるのが、**共通のねらいを一緒に策定し、共有**していくことです。最初の段階では自治体や保護者、地域の人々による包括的な会議体ができていなくても、園・小学校・教育委員会などの単位で開始してもよいと思います。そして、複数の園がかかわる場合は１園ずつ広げていきながら、それぞれが本当に大事にしていることは何かを、「子どもの姿」をもとに語り合います。それを繰り返しながら自治体ごとの「共通のねらい」をつくり上げていきます。

次に、共通のねらいを実現するにあたり、**どのような課題があるかを明確化**します。例えば「複数の園や小学校の共通の研修時間が取れない」「互いのカリキュラムへの理解が進んでいない」など、具体的な課題を挙げて、園や小学校が解決すること、教育委員会が解決することなどのように、**役割を整理して分担**していきます。共通のねらいの策定も含め、これらのプロセスは、コーディネーターの支援があれば進めやすくなるでしょう。

課題を分担したらその実行となりますが、**やることを絞って実行**することも、大切な考え方になります。例えば、多くの園や小学校が実施している研修の日程を合わせて、合同研修にすることでも、幼保小接続は大きく前進します。何よりも各自治体がステップアップしていくことが重要で、１つずつ進めていくことで次第に全体像が見えるようになり、取り組みも深化していきます。ただし、取り組みが偏らないように、「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き」などを、チェックリスト代わりに活用するとよいでしょう。

そのようにフェーズを進めていき、「フェーズ４」に到達すると、しくみを定着・継続させ、地域に幼保小接続の文化を根づかせていくことが必要になります。自治体や地域の人々の理解が不可欠なため、難しさを感じるかもしれません。この段階では**仲間づくり**がポイントになります。園や小学校などのよさや課題を「見える化」することで理解や共感を深め、ともに取り組む仲間を増やしていきましょう。幼児期の遊びの意図や、それによる成果は、専門知識のある人以外には伝わりづらいものです。日々、園ではどのような試行錯誤をしているかを、コーディネーターなどの力も借りながら、発信していくことが大切になります。

――園長先生や保育者はどのような意識で取り組むとよいでしょうか。

令和の学校教育のあり方として、子ども一人ひとりの主体性を生かして資質・能力を伸ばす「個別最適な学びと協働的な学び」が推進されています。翻って考えるに、個別最適な学びを長く追究してきたのが幼児教育・保育でしょう。幼児教育・保育では、先生方が生活の中で、子ども一人ひとりの可能性を大切にしながら寄り添う実践を積み重ねています。園の先生方が小学校以降の教育から学ぶことはもちろんありますが、小学校以降の先生方が幼児教育・保育に学べることは、非常に多いはずです。園における先生方の試行錯誤は、まさに教育の質を支える財産です。子どものためにどのような試行錯誤を重ねているのか、その意図や教育の質に結びつく成果とともに、積極的に発信していってください。そうすることで社会全体にさまざまなよい影響がもたらされるでしょう。

園長先生には、園だけでなく地域全体に対する課題意識をもってほしいと思います。そうした視点をもつと、小学校とのかかわり方を考えるようになりますし、地域にはさまざまなサポート機関があることにも気づいていきます。こども家庭庁の設置を始めとして、幼児教育への関心が高まる中、園は地域でますます重要な役割を担う存在になっていくと考えています。

架け橋期の取り組みの充実は、子ども一人ひとりの育ちを支えるだけではなく、保育者の子どもを見る視点を広げ、その成長する姿を共有できるなど、やりがいの向上にもつながるでしょう。今後、国や自治体による支援の充実も図られていきますので、子どもを真ん中にしながら、関係者全員で心を１つにして進んでいければと思います。

自治体の取り組み事例

神奈川県横浜市

多様な園や学校が共有・協働するしくみを整え育ちと学びをつなぐ

取り組みのポイント

- 汎用性の高いカリキュラムの方向性を示し、各園・学校が理念や実態に応じて活用できるようにする。
- 園や小学校が実際の子どもの姿を通して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりに、共通理解や協働を図るしくみをつくる。
- 顔の見える交流や研修の場を充実させて、相互理解や協働を促進する。

理念や活動が異なる園や小学校が、「10の姿」をもとに協働する

30年以上前から幼保小の交流事業を推進

横浜市こども青少年局
保育・教育部 保育・教育支援課
幼保小連携担当
田村憲一 課長

横浜市こども青少年局
保育・教育部 保育・教育支援課
幼保小連携担当
鈴木暁範 係長

政令指定都市として約378万の人口を擁する横浜市には、市内に338校の市立小学校、223園の幼稚園、64園の認定こども園、およそ1,500園の保育所が存在（2022年度）し、学区が広い小学校では40園以上から入学するケースもあります。各園の保育の方針は多様なため、それぞれの体験をしてきた新1年生に対して、小学校が指導やサポートに苦労することもありました。そうした難しさを少しでも解消するため、30年以上前から、幼保小の先生方が集まり、情報を交換して相互理解を深める取り組みを続けてきました。そんな中、情報交換だけでなく、保育や教育そのものをつなごうという声が挙がり、2012年、同市は「横浜版接続期カリキュラム　育ちと学びをつなぐ」を策定しました。横浜版接続期カリキュラムでは、園向けのアプローチカリキュラムと、小学校向けのスタートカリキュラムを導入していますが、いずれも各園・各小学校が自由に遊びや活動を組み立てられる汎用性があります。こども青少年局保育・教育支援課の田村憲一課長は次のように説明します。

「各園では、遊び中心の保育を展開したり、文字や数などの学びに注力したり、運動やスポーツを重視したりと、理念や活動が大きく異なります。また、小学校の実態もさまざまです。そのため、

共通のカリキュラムをあてはめるのではなく、横浜市がめざす考え方と枠組みを示し、その中で園や小学校が理念を大切にしながら、市全体として同じ方向に進めるようにしました」

アプローチカリキュラムの活動の柱は、「学びの芽生えを大切にした活動の充実」「協同的な遊びや体験の充実」「自立心を高め新しい生活をつくり、安心して就学を迎えられる活動の充実」です（図1）。これらの体験を通して「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下、「10の姿」）を育んでいきます。

スタートカリキュラムは、園での育ちを学びにつなげるために、「なかよしタイム」「わくわくタイム」「ぐんぐんタイム」の３つの学びの時間帯を設けているのが特徴です（図2）。小学校でのスタートカリキュラムの実施率は100％であり、園での生活を意識したゆったりとした時間の中で、教科の学習へと入っていく取り組みも広がりつつあります。

園と小学校が連携・接続の具体的な活動を検討する際に、共通の手がかりとするのが「10の姿」だと、同課の鈴木暁範係長は話します。

「園や小学校が『10の姿』を意識してカリキュラムを作成し、支援や環境づくりを検討することが、子どもの連続した育ちを支えるために重要だと考えています。小学校での『10の姿』の浸透度には課題があるので、市として小学校に例示するカリキュラムの枠組みには『10の姿』を組み込み、できるだけ目に触れるように工夫しています」

横浜版接続期カリキュラムとともに、幼保小連携における共通の指針となっているのが、「よこはま☆保育・教育宣言」です。「安心できる環境をつくり、一人ひとりを大切に保育します」「子どもの育ちと学びを支える主体的な遊びを大切にします」という２つの宣言があり、市の保育・教育施設の関係者が、何を大切にして乳幼児期の子どもにかかわるかを考える基本となります。（P.8 図3）。

「宣言に描かれている『安心できる環境』や『主体的な遊び』といった内容は、小学校での育ちにも大きくかかわります。そのため、小学校に対しても、特にスタートカリキュラムの時期は、この宣言を意識することを伝えています」（鈴木係長）

図1 横浜版アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムのつながり

アプローチカリキュラムの活動の柱

- 学びの芽生えを大切にした活動の充実
- 協同的な遊びや体験の充実
- 自立心を高め新しい生活をつくり、安心して就学を迎えられる活動の充実

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）

- 健康な心と体
- 自立心
- 協同性
- 道徳性・規範意識の芽生え
- 社会生活との関わり
- 思考力の芽生え
- 自然との関わり・生命尊重
- 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- 言葉による伝え合い
- 豊かな感性と表現

スタートカリキュラムで育てたい子どもの姿

- 幼児期の学びを生かして、自己肯定感を高め、主体的に学習に取り組む子ども
- 新しい学級や学校のルールを受け入れ、学級の一員として協同的に活動できる子ども
- 安心して自分を発揮し、やってみたいことに向かってがんばる子ども

※横浜市の公開資料をもとに編集部で作成。

図2 スタートカリキュラム　3つの学びの時間帯

なかよしタイム	一人ひとりが安心感をもち、担任や友達に慣れ、新しい人間関係を築いていく時間です。自分の居場所を学級の中に見出し、徐々に集団の一員としての所属意識をもち、学校生活の基盤である学級で、安心して自己発揮できるように工夫していきます。
わくわくタイム	幼児期に身に付けた力を発揮し、主体的な学びをつくっていく時間です。生活科を中心として、様々な教科等と合科・関連を図り、教科学習に円滑に移行していくための時間として位置付けています。幼児期における遊びを通した総合的な学びを生かし、子どもの思いや願いに沿った学習や、具体的な活動や体験をきっかけにして各教科等につなげる学習を大切にすることで、主体的に学ぶ意欲を高めます。
ぐんぐんタイム	わくわくタイムやなかよしタイム、日常の生活の中で子どもが示した興味や関心をきっかけに、教科等の学習へ徐々に移行し、教科等特有の学び方や見方・考え方を身に付けていく時間です。

※横浜市の公開資料をもとに編集部で作成。

接続期カリキュラムを通して探究心を育みたい

アプローチカリキュラムにもとづく具体的な実践は園によって異なりますが、ここでは鈴木係長が印象的だったと語る実践を紹介しましょう。

ある園で子どもたちが「ギネス記録に挑戦する」という目標を立て、紙飛行機の飛距離を伸ばす挑

戦を続けていました。子どもたちは保育者の助けを借りて大人向けの書籍なども参考に試行錯誤を重ね、10メートル以上の飛距離を記録しました。

「保育者が、『この本は難しいから読めないよ』などの制限を設けずに本気で子どもにつき合い、日に日に記録を伸ばしていく様子が印象的でした。大人の支援のあり方次第で、子どもはどこまでも探究していくことを改めて感じました」（鈴木係長）

そうした探究的な遊びは、非認知能力の育成にもつながると考えています。

「横浜版接続期カリキュラムの中では『非認知能力』という言葉は用いていませんが、探究心をサポートすることで、粘り強さや協調性などの非認知能力も育んでいけると思います」（鈴木係長）

そのような経緯もあり、2022年には「探究心を育む遊びプロジェクト」という研究会を立ち上げました。市内の幼・保・小・特別支援学校から希望者を募り、当初の定員を超える40人が参加。探究心を軸として、園や小学校における遊びや活動を高めていく指導やサポートのあり方を、合同で研究しています。年度末には、市庁舎のアトリウム＊で総合発表会を実施し、保育・教育関係者のみならず、保護者などにも広く発信していく予定です。

連携というと大所帯になりがちだった横浜市では、探究心の育成のような特定のテーマを設けた、プロジェクト型の少人数での幼保小連携は初めての試みで、うまくいくか不安を抱きながら始めたといいます。しかし、心配をよそに参加者一人ひとりがテーマに強い関心をもっているために対話が深まりやすく、それぞれの園や小学校の中で取り組みを広げる様子が見られるなど、さまざまなよさがありました。そのため、今後もそうした幼保小連携を充実させていく考えです。

図3 よこはま☆保育・教育宣言 ～乳幼児の心もちを大切に～

宣言1 安心できる環境をつくり、一人ひとりを大切に保育します

子どもたちの命を守るとともに、一人ひとりの個性や発達に合わせた環境の中で、自分を「かけがえのない存在」だと感じて日々を過ごすことができるように関わります。

1. 安心感・信頼感を大切に、子どもを守ります。
2. 子ども一人ひとりを受け止めます。（子どもたちが自己肯定感をもって、様々なことに挑戦できるようにします。）
3. 子どもが様々な人と関わることを大切にします。（色々な人と関わり、多様性に気付けるようにします。）

宣言2 子どもの育ちと学びを支える主体的な遊びを大切にします

乳幼児期の育ちと学びは、自分の遊び（体験）を通して「未知なことや分からないことを自分なりに考え、自分自身が納得するまで探究し続けること」です。このような乳幼児期の育ちと学びは、生涯にわたる子どもたちの生きる力を育みます。

1. 乳幼児期の子どもが、豊かで多様な環境と関わりながら育つことを大切にします。
2. 夢中になって遊びこむことによる育ちを大切にします。
3. 保育者の重要な仕事は一人ひとりの子どものよさを発見し、育てることです。

※横浜市の公開資料をもとに編集部で作成。

互いの顔の見える交流を通して、ともに子どもを育てる関係を築く

互いの支援の工夫を伝え合い子ども理解の幅を広げる

同市では幼保小の先生方が顔の見える関係を築けるように、研修にも力を入れ、年4回の幼保小合同の接続期研修会を行っています。さらに、グループに分かれて幼保小のそれぞれの代表者が実践を発表し、子どもの育ちや学びについて語り合い、相互理解を深める研修も開催しています。

「『どのような場面で子どものよさが発揮されたか』など、幼保小の先生方がそれぞれの観点から子どもの姿をもとに語り合うことを大切にしています。さらに、互いが実践の中で工夫しているポイントを伝え合うことで、子どもを見取る幅が広がっていきます」（鈴木係長）

1つの子どもの姿に対しても、それぞれの考える支援が異なることもあります。例えば、1人で過ごしている子どもに対して、ある小学校の先生

＊ガラスなどの光を通す素材で屋根を覆った大規模な空間のこと。

は「友だちと遊んでおいで」と促したり、ほかの子どもに声をかけるようにお願いしたりする支援をよく行っていたそうです。しかし、研修で語り合い、実践を見る中で、園の先生が子どもの様子を通して本当は友だちと遊びたいのか、それとも１人でいたいのかという思いをくみ取り、それに合わせた支援をしていることを知り、大きな気づきがあったといいます。

「園や小学校、先生同士などの違いを理解することで、どの発達段階においても一人ひとりに合わせた支援がしやすくなると思います」（田村課長）

また、研修を通して園とのつながりを意識するようになり、園で親しまれている色水などの素材を生活科に取り入れた小学校の先生もいました。

同市ではそうした全体的な研修のほかにも、近隣の園と小学校が対話をする機会を設けています。園長・校長会、保育者による授業参観、合同研修、公開保育参観、担当者会などさまざまな場がありますが、その原点には、互いを尊重し合う気持ちを育てたいという思いがあります。

「顔を合わせて語り合う中で、互いの立場での頑張りや苦労を理解し、共感し合えるようになります。連携先に知っている先生が１人でもいれば、『園、あるいは小学校にもっと頑張ってもらいたい』といった不満は生じず、ともに解決しようという姿勢になると思います」（田村課長）

園でも小学校でも
夢中になる中で子どもは学ぶ

カリキュラムを始めとしたさまざまな枠組みが整い、子どもの育ちに好影響が表れている園や小学校も見られます。

「ある小学校の先生が、『高学年の子どもがいろいろなことに興味をもって取り組むようになったのは、幼保小連携を継続してきた成果だと思う』と話してくれました。園も小学校も業務が忙しく、幼保小連携の優先順位が下がる場合があることも理解していますが、接続期に適切な支援をすると、子どもの育ちは大きく変わりますし、結果的に園や小学校の運営がスムーズになることは、繰り返し伝えていきたいと思います」（田村課長）

園側からは、「幼児期に育まれた力が小学校教育にどのようにつながっていくかをイメージできた」「子どもたちの体験の幅を広げたり、遊びの質を高めたりする環境構成を、より工夫するようになった」といった声が聞かれます。

今後は、人口規模が大きい都市ならではの浸透度の濃淡を埋めるべく、カリキュラム作成や研修制度、事例発信の方法など、それぞれの取り組みの「質」を高めていくことをめざしています。例えば、各地区で、幼保小の先生が「10の姿」をもとに子どもの育ちを共有する研修を行っているか、アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムを話し合って一緒に作成しているかなどを調査し、共有・協働の機会を増やす支援につなげることを考えています。園の先生と小学校の先生が互いの環境へ行って先生をする、あるいは子どもとして保育や授業を体験するという交流のアイデアもあります。また、よい事例に共通するエッセンスを一般化して、動画なども用いながらより多くの先生方の目に触れる方法を模索したいとも考えています。その視線の先には、一人ひとりの子どもの未来があります。

「園でも小学校でも、自分のやりたいことに夢中で取り組む中に学びがあることに変わりはなく、そうした体験の積み重ねで大切な力が育っていくと思います。保育や教育でそれを実践するには、私たち大人が、子どもがおもしろがる姿を受容・尊重し、ともにおもしろがれるようになることが必要ではないでしょうか。そのような大人として子どもにかかわり、その体験が将来どう生かされるのかという視点を忘れずに、支援のあり方を考え続けていきます」（田村課長）

横浜市

◎**人　口**：約 378万人　◎**面　積**：437.4 km²
◎**園・小学校の数**：市立小学校 338校、幼稚園 223園、認定こども園 64園、保育所（横浜保育室を含む）約 1,500園（2022年４月現在）

小学校の取り組み事例

横浜市立恩田小学校（神奈川県）

幼児期の体験をベースに一人ひとりが自己を発揮し「自ら育つ」学校へ

取り組みのポイント

- 園の環境にならい、一人ひとりが安心して自己を発揮できる場をつくる。
- 指示やルールに漫然と従うのではなく、自分で考えて問題を解決する力を育む。
- 教科学習は、子どもの興味や関心を出発点として展開する。
- 幼保小の先生の交流や情報交換を活発化し、ともに子どもにかかわる関係を強化する。

「子どもを育てる学校」から、「子どもが育つ学校」へ

入学期は園生活に近い活動でスムーズな接続を図る

登校してランドセルを置いた後、友だちと誘い合って、好きな遊びやお絵かき、工作など、約30分間にわたり、興味のあることに取り組む――。横浜市立恩田小学校が１年生の４、５月に設定している「あそびタイム」では、子どもたちは、安心できる環境や信頼できる先生に囲まれていた園生活を思い出すかのように、教室でも自由に過ごしながら「自分らしさ」を発揮していきます。そして、その様子を見守る先生は、一人ひとりの特性を見取り、どう支えていくかを考えます。

こうしたサポートの原点には、子どもを主語とした学校教育をめざし、「子どもを育てる学校」から「子どもが育つ学校」に変わっていこうとする思いがあると、校長の寳來生志子（ほうらいきしこ）先生は話します。

「幼児教育では、子どもは自ら学ぶ意欲と力をもつ有能な学び手と理解されています。小学校でも同じ子ども観を共有して、幼児教育と連動しながら、学びの基礎をつくり上げていく必要があると考えています」

お話ししてくださった先生
横浜市立恩田小学校
校長
寳來生志子（ほうらいきしこ）先生

同校では、横浜市が策定した「横浜版接続期カリキュラム」に基づき、スタートカリキュラムを編成しています。スタートカリキュラムの柱となるのは、「なかよしタイム」「わくわくタイム」「ぐんぐんタイム」の３つの学びの時間帯（P.7 図2参照）で、その内容は各校が教育目標や子どもの実態に合わせて設定できるようになっています。同校では、子どもがスムーズに小学校の生活や学びに溶け込めるように検討を重ね、見通しをもった週案を作成しました（図1）。学校独自の設定であ

図1 恩田小学校のスタートカリキュラム週案

入学して2週目は、「なかよしタイム」を中心として、友だちと仲よくなったり、身近な疑問を追いかけたりする活動が中心です。幼児期の学びと児童期の学びを行きつ戻りつしながら、両者をつなぐような構成になっています。

1年1組	月曜日　4月11日		火曜日　4月12日		水曜日　4月13日		木曜日　4月14日		金曜日　4月15日	
行事予定	午前授業 集団登校（全学年）		午前授業 朝会（全学年）		給食開始（全学年）		発育測定（1年）		• 避難訓練（火災） • 委員会（全学年）	
朝の活動		**あそびタイム** （9：00まで）		**あそびタイム** （9：00まで）		**あそびタイム** （9：00まで）		**あそびタイム** （9：00まで）		**あそびタイム** （9：00まで）
1	恩田 恩田 国語	**なかよしタイム** • あいさつ • 元気かな？（○○さん） • 歌っておどろう • 読み聞かせ	恩田 恩田 国語	**なかよしタイム** • あいさつ • 元気かな？（○○さん） • 歌っておどろう • 読み聞かせ	恩田 恩田 国語	**なかよしタイム** • あいさつ • 元気かな？（○○さん） • 歌っておどろう • 読み聞かせ	恩田 恩田 国語	**なかよしタイム** • あいさつ • 元気かな？(○○さん) • 歌っておどろう • 読み聞かせ	恩田 恩田 国語	**なかよしタイム** • あいさつ • 元気かな？（○○さん） • 歌っておどろう • 読み聞かせ
2	国語 国語 図画工作	**なかよしタイム** •「自己紹介ゲーム」をしよう（好きなくだもの） • 動画を見る • 絵をかく • 自己紹介をし合う	国語 国語 図画工作	**なかよしタイム** •「自己紹介ゲーム」をしよう（好きな動物） • 絵をかく • 自己紹介をし合う	国語 国語 図画工作	**なかよしタイム** •「自己紹介ゲーム」をしよう（好きな形） • 絵をかく • 自己紹介をし合う「右左であそぼう」 • 動画を見る	恩田 恩田 学活	**わくわくタイム** **「学校のはてな？を解決しよう」** • お勉強はいつするの？ • お道具箱どうするの？ • 発育測定ってなあに？ • 着替え	学活 学活 行事	**わくわくタイム** • 避難訓練ってなあに？ • どうやって避難すればいいのかな？ 【避難訓練】
3	恩田 恩田 生活	**わくわくタイム** **「学校のはてな？を解決しよう」** • 荷物はどうしよう？（お道具箱・体操着・探検バッグ）	恩田 体育 体育	**ぐんぐんタイム** **「着替えてみよう」** • どうやって着替えたらいいのかな？ • 着替え終わったら校歌を歌おう • 校庭であそぼう	恩田 恩田 生活	**わくわくタイム** **「学校のはてな？を解決しよう」** • 荷物はどうしよう？（給食セット、防災頭巾）	行事 行事 行事	**【発育測定】** • 発育測定大作戦を成功させよう！	生活 生活 生活	**学校探検** • 中休みに行った場所を共有する • 恩田小学校には何があるのだろう？ • どうしたら楽しく探検できるかな？ • 見つけた場所を共有する
4	学活 学活 学活	**わくわくタイム** **「なかよく帰ろう」** • 配布物を配る • 帰りの支度 • 方面確認	学活 学活 学活	**わくわくタイム** **「なかよく帰ろう」** • 配布物を配る • 帰りの支度 • 方面確認	学活 学活 学活	**わくわくタイム** **【今日から給食】** **「給食のはてな？を見つけて解決しよう」** • 給食当番 • におい→給食室を外から探検する • 給食の準備をしよう	国語 国語 国語	**「あいうえおうさま」** • 文字練習と言葉集め • ひらがな屋のお店 •「どうぞ」「ありがとう」 【校長先生】	国語 図画工作 図画工作	**「はじめてのなまえ」** • 自分の名前を書く • 周りの色を塗る

「恩田」は、教科ではない授業時数以外の教育活動です。

各内容は、子どもの目線に立ち、子どもの疑問、興味・関心、思いや願いに基づいています。

子どもの集中力が続くよう、小刻みな時間設定も可能です。

※恩田小学校のカリキュラムを、一部編集して掲載。

る「あそびタイム」で気持ちを高めた後は、歌やダンス、読み聞かせなど、なじみのある活動で構成した「なかよしタイム」に移ります。入学直後は「なかよしタイム」が中心ですが、子どもが学校生活に慣れてくると、次第に生活科を中心とした学習活動の「わくわくタイム」、教科などを中心とした学習活動の「ぐんぐんタイム」の割合を増やしていきます。

必要感のある疑問を引き出して自ら学び続ける力を育てる

多くの小学校が入学後に行う「学校探検」では、あらかじめ先生が設定したルートに沿って教室や施設を巡る活動が一般的です。また、給食について学ぶ活動では、給食当番のルールなどを教えるケースが多く見られます。それに対して同校の「わくわくタイム」では、先生が子どもの発想や考えを引き出しながら、子ども自身が必要感のある疑問をもち、自らの活動をつくり上げていきます。

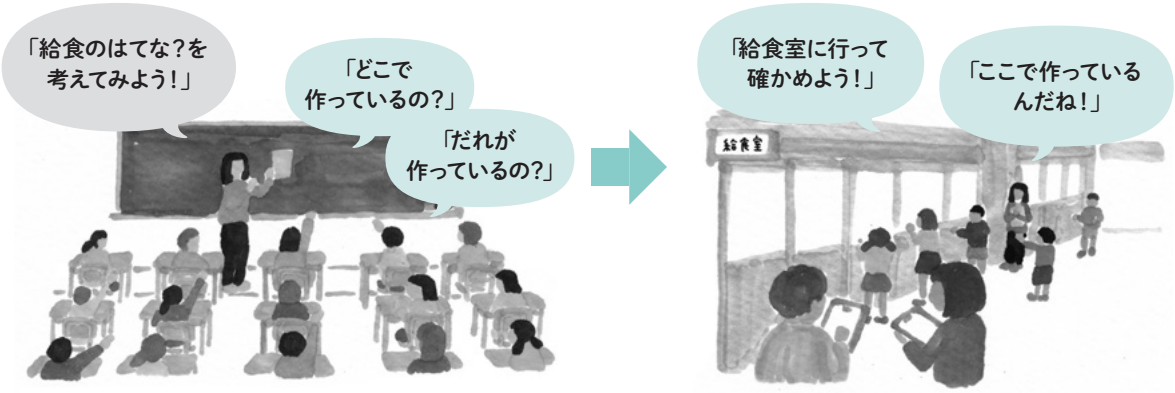
「園では、子どもたちが遊びに取り組む中で、多くの学びが生まれます。ところが、小学校に入ると先生の指示に静かに従うことが求められるため、自分から考えたり動いたりしない『考えないスイッチ』が入ってしまう子どもが少なくありませんでした。本校では、先生が子どもに対して『みんなの考えを聞かせて』『何をしたいのかを一緒に考えよう』と質問をぶつけることで、子どもにそれまで育まれてきた資質･能力を引き出しています」（寶來先生）

「給食のはてな？を見つけて解決しよう」という活動でも、給食室まで決められたルートを並んで歩かせたりせず、「給食はどこで作っている？」「においのする方に行ってみよう！」といった子ども

図2 恩田小学校のスタートカリキュラム①

給食のはてな?を見つけて解決しよう

最初に子どもから集めた、給食に関する疑問を解決していくという流れで、必要感のある疑問を自らの考えに沿って探究していきます。



の意見をもとに展開しました。遠回りをして向かう子どもがいても、先生は子どもが思いを存分に満たせるよう、口を出さずに見守りました（図2）。

初めて体育館へ行く活動にも、個々の考えをもとに協働して解決することを促しました。体育館のドアが施錠されていたため、先生が「どうしたらいいと思う？」と声をかけました。子どもたちは職員室に向かい、鍵置き場から1つを選んで体育館に戻りました。しかし、別の鍵だったためにドアは開かず、再び職員室を訪れることに。正しい鍵を選んでドアが開くと、みんなの力を合わせて体育館に入れた喜びから、子どもたちは歓声を上げました（図3）。その後、子どもから「漢字がわからなくて間違えたので、ひらがなで書いてほしい」という要望があり、すべての鍵のキーホルダーにふりがなをつけたそうです。

「最初から先生が鍵を開けていたら、協力して問題を解決するプロセスは体験できませんでした。みんなで相談しながら体育館に入れたという体験は一人ひとりの自信になり、ほかの場面でも友だちの考えを大切に聴いたり、友だちに学んだりする姿勢につながるはずです」（寳來先生）

算数や国語などの学習でも、生活科の内容や興味・関心のあることに結びつけて、学びを深めていきます。例えば、毎日の読み聞かせや、学校探検で図書室を見学して本に興味をもったことをきっかけに文字の学習に入ったり、算数の数の概念を学ぶ学習では、「あそびタイム」で子どもが慣れ親しんでいるおはじきを使ったりします。時間割も、子どもの集中力が続くように10分や15分といった小刻みな時間を設定することもあります。

「教科学習でも、先生が『これを読んでどう思った？』などと働きかけて、子どもの問いを引き出しながら授業を進めていきます」（寳來先生）

“園では、幼児期にしかできない体験を大切にしてほしい”

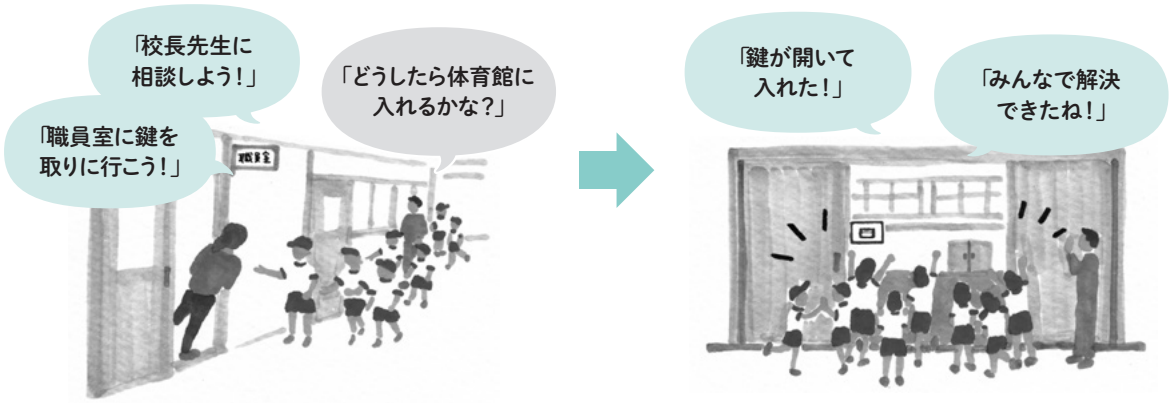
「10の姿」を手がかりとして全教職員で1年生の育ちを共有

入学式前には全教職員が参加して、スタートカリキュラムに関する研修会を実施し、スタートカリキュラムのねらいや内容、1年生を支えていく方針を学校全体で共有します。子どもの育ちについて目線合わせをする際の手がかりとしているのが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下、「10の姿」）です。「10の姿」をベースに小学校で

図3 恩田小学校のスタートカリキュラム②

体育館のドアの鍵が閉まっていたら……

体育館のドアの鍵が閉まっていたとき、先生が対処するのではなく、子どもたち自身が解決方法を考えることで、友だちと協力しながら行動する力を育んでいきます。



育てたい資質・能力につなげています。また、教職員だけでなく上級生にも、１年生を子ども扱いしすぎないようお願いをしています。

幼保小の連続した学びを充実させていくために、地域の園との交流や情報交換も大切にしています。2022年５月に実施したスタートカリキュラムの授業研究会では、地域の園から保育者を招いて小学校での実践を共有しました。保育者が時間を確保しづらい場合は、午睡中などの空いた時間だけの参加とし、その後、感想を送ってもらいました。

「コロナ禍前、前任校では地域の園に公開保育を実施してもらい、複数の小学校の先生たちと参観して、子どもの姿について『10の姿』をもとに保育者と語り合う研修を実施していました。小学校の先生が年長の子どもたちの活動する姿を見て、『年長さんでも話し合えるのですね』と幼児期の子どもに対する見方を改めたり、子どもの興味を引くための環境構成を学べたりなど、互いに多くの発見がある有意義な研修でした」（寳來先生）

小学校には、「授業中は椅子に座る」「廊下は一列で歩く」など、集団生活を送る上でのさまざまなルールがあります。そうしたルールを子どもたちに浸透させる際にも、一方的な押しつけにならないような工夫をしています。例えば、入学式後の保護者への説明の際には、子どもに折り紙を渡し、「これで遊んでいてね」と伝えると、子どもたちは集中して静かに待っていられます。そのように、子どもが自然に集団生活に溶け込めるような環境やルールのあり方を、学校側がこれまで以上に考えていく必要があると、寳來先生は話します。

「園の先生方が学校生活のルールや学習活動などを念頭に置き、入学前の準備について質問されることがよくあります。それに対する私からの答えは、『特別な準備は必要ない』です。時間の潤沢な幼児期に、好奇心をもち、好きなことに夢中になり、自分で何かを決めて取り組む。そうした体験をしてきた子どもたちが集まると、それぞれのよさを分かち合ってすばらしい学びが生まれます。これからも園では、小学校の前倒しは考えずに幼児期にしかできない体験を支えることに集中し、わくわく感を体いっぱいに詰め込んだ子どもたちを、安心して小学校に送り出してほしいと思います」

横浜市立 恩田小学校

学校教育目標は、「自ら学び、ともに豊かな生活を創り出す子どもの育成」。2022年度は、教職員の受容的なかかわりと子ども自らが学びたくなる環境づくりに重点を置く。

◎ **校　長**：寳來 生志子先生
◎ **所在地**：神奈川県横浜市青葉区桂台 2－36
◎ **児童数**：462人（2022年10月現在）

参考資料

「子ども」について語り、つながる！
園・小学校の対話の3ステップ

対話ステップ 1 育みたい子ども像

対話の時間のめやす 20分

架け橋期を通じて、私たちはどのような子どもを育てていきたいか

園と小学校の保育・教育を連続的に捉え、それぞれの活動の改善について考えるためには、まず、育みたい子ども像について語り合うのがよいでしょう。その際、「○○ができる子ども」「○○な資質・能力をもった子ども」といった「めざす姿」を言葉にするだけでなく、園や小学校の日常の中で実際に見られた子どもの姿を具体的に話すと、話が深まりやすくなります。保育者と小学校の先生が混在した4、5人のグループをつくって、「ある子どもが遊びの中で友だちとこんな関係を見せてくれた」「ある子どもは授業中にこんな行動をした」などと話していきましょう。幼保小共通の資料として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）を印刷して参加者に配布すれば、それを手がかりに「そういえばあの子がこんな姿を見せてくれたな」と思い出しやすくなります。

子どもの生き生きとした姿を共有する中で、保育者と小学校の先生方はきっと温かな気持ちになり、安心して連携の話し合いを始められるのではないでしょうか。

ファシリテーター役から参加者への声かけ例

「最近、目にした『すてきだな！』と思った子どもの様子を紹介してみましょう」
「子どもの様子が目に浮かぶように、できるだけ具体的な場面を挙げて話してみましょう」
「紹介し終わった子どもの様子は、模造紙や付せんに書きとめておきましょう」

対話ステップ 2 遊びや学びのプロセス

対話の時間のめやす 20分

育みたい子ども像に、幼保小ではどのように近づいていくのか

園と小学校で、日々の子どもたちの様子から育みたい子ども像に迫ったら、それはどのような遊び・学びのプロセスの中で実現したものなのかを語り合ってみましょう。グループ内で挙げられた子どもたちの姿について、「この子はこうした行動をするようになるまでに、このような変化をしてきた」などと話していきます。たくさんの事例がグループ内で挙げられたら、園と小学校それぞれで、参加者が特に変化のプロセスを聞きたいと思った事例に絞るようにします。子どもたちが行きつ戻りつしながらも、保育者や小学校の先生方の想定を超えて成長していることが実感でき、参加者は改めて架け橋期の教育のやりがいを味わえるでしょう。

子どもの変化を語る際には、子どもの様子をできるだけ広く捉えて語るように心がけます。例えば、友だちとの関係で変化を見せた子どもについて語るときは、その子の保護者とのかかわり方や遊びへの向かい方なども思い出してみると、より子どもを総合的に捉えることができるでしょう。

ファシリテーター役から参加者への声かけ例

「グループで紹介された子どもたちは、どのように成長してきたのかを話してみましょう」
「子どもの成長を広い視点で捉えられるよう、成長過程でのさまざまなエピソードを紹介してみましょう」
「子どもの成長のプロセスを聞く中で、驚きや発見があったら、模造紙や付せんに書きとめておきましょう」

現在、各地で保育者と小学校の先生方との交流の取り組みが行われています。幼保小の交流を互いの保育・教育をよりよくするきっかけとするには、「子ども」を軸に対話を行うことが大切です。ここでは架け橋期の子どもの姿や発達について、小学校の先生方と語り合う際の３つのステップをご紹介します。園と小学校との交流の取り組みを、よりよくするためのヒントとしてご活用ください。

対話ステップ 3 指導上の配慮

対話の時間のめやす 20 分

遊びや学びを深めるためのかかわりとは

園と小学校それぞれが、育みたい子ども像に近づいていくための遊びや学びのプロセスを、子どもたちの具体的な様子をもとに語り合ったら、次は、そうした成長を支援するために、保育者や小学校の先生はどのように子どもにかかわっているのかを語り合います。「自分はどのようにその子どもを見守ったのか」「自分のかかわり方をどうやって決めていったのか」を話すことで、互いの支援の共通点や相違点を考えることができるようになります。

グループで子どもへのかかわり方を語り合う中では、「自分なら別のかかわり方をする」「そのかかわり方には賛成できない」といった違いを感じる場面が出てきます。支援の形は子ども一人ひとりで異なり、正解はありません。そこで、話し合いに先立って、自分とは違う考えに直面したときは、「なぜそうした違いが生まれるのか」「自分の知らないよさがあるとしたらそれは何だろう」と考えてみることを勧めるなど、異なる価値観への向き合い方をアドバイスしておくとよいでしょう。

ファシリテーター役から参加者への声かけ例

「ここまで取り上げた子どもの成長に、保育者・先生としてどのようにかかわってきたかを話してみましょう」
「成功談だけでなく、失敗や迷い、不安も話してみてください」
「自分とは異なるかかわり方に出合ったとき、すぐに否定せずに、『そのようなかかわり方をするよさは何だろう』と考えてみてください」

教育活動の改善に向けて、対話を振り返る

振り返りの時間のめやす 20 分

話し合いの最後に、参加者それぞれがどのような気づきがあったのかを整理するための振り返りの時間を設けます。

振り返りの３つの観点

1. 今日の対話の中で心に残ったエピソード、参加者の言葉は何か
2. 保育者（小学校の先生）として、自分が大切にしていきたいことは何か
3. 幼保小が連携して子どもの育ちを支援するために、自分ができそうなこと、やってみたいことは何か

幼保小の対話を具体化させるためにドキュメンテーションを活用しましょう！

保育者と小学校の先生方の対話を充実させるためには、日々の保育・教育の場面を思い出しながら、具体的な子どもの様子を語るようにすることが大切です。子どもの様子が具体的であるほど、参加者の捉え方にズレがなくなりますし、子どもの様子を生き生きとイメージできることで、温かな雰囲気の中で対話が進んでいくからです。

しかし、初対面の人が多い話し合いだと緊張してしまい、普段の子どもの様子を思い出しにくい参加者もいるかもしれません。そこで参加者同士が子どもの姿を具体的にイメージするためのきっかけとして、園であればドキュメンテーションを活用するとよいでしょう。最近では小学校でも、生活科や図画工作科、特別活動などでドキュメンテーションを作成するケースがありますが、もしもドキュメンテーションとして作成していない場合は、子どもの活動の様子を収めた写真などを持参してもらいましょう。

データ
紹介

アジア８か国の調査から見えてきた

「ハッピー&レジリエント」な子どもをどう育むか

コロナ禍の長期化で子どもの心身への悪影響が心配される中、「レジリエンス」という言葉が注目されています。困難な状況に直面したときに大切な力となるレジリエンスは、子どもの「ウェルビーイング」（心身の良好な状態、幸福）にも深くかかわっていると考えられています。レジリエンスとはどのような力か、子どもにどのように育めばよいかを、ベネッセ教育総合研究所が運営を支援するチャイルド・リサーチ・ネット所長の榊原洋一先生にうかがいました。

チャイルド・リサーチ・ネット所長 榊原洋一先生（さかきはら・よういち）

医学博士。チャイルド・リサーチ・ネット所長。お茶の水女子大学名誉教授。ベネッセ教育総合研究所常任顧問。日本子ども学会理事長。小児科医。専門は小児神経学、発達神経学、特に注意欠陥・多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。

レジリエンスの高さが心身の状態や幸福感を左右する

レジリエンスとは、困難な状況を受け入れて、自分の中で折り合いをつけ、回復していく力を指します。暴風雨に対して直立して我慢する強さではなく、柳の木のようにしなやかにたわみながらも元に戻るイメージといえるでしょう。コロナ禍や世界情勢の変化など、社会の将来像として多くの困難に直面する可能性が否定できないからこそ、一人ひとりがたくましく、しなやかに生き抜くために、レジリエンスは必要です。

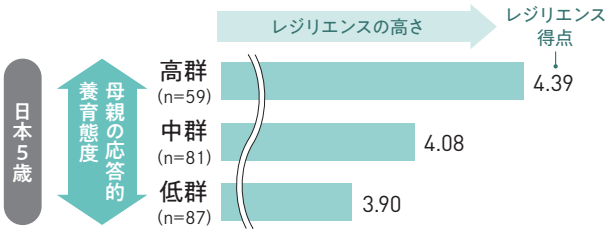
レジリエンスを育む上で難しいのは、レジリエンスそのものは表面的な姿として見えないことです。元気に跳ね回る子どもが必ずしもレジリエンスが高いとは限らず、困難に直面したときに、どう反応するかを見ることでしかわかりません。

チャイルド・リサーチ・ネットでは、日本を含むアジア８か国で子どものウェルビーイングとレジリエンスに着目した調査を行いました。すると、すべての国でレジリエンスが高いほどウェルビーイングが高いという結果になりました。

さらに、レジリエンス育成に効果的な要因を調査すると、「①母親*の応答的養育態度」「②母親の

図1 レジリエンスの育成に効果的な母親のかかわり

● 母親の応答的な養育態度の度合いが高いほど、子どものレジリエンス得点は高い



子どものレジリエンス育成に特に効果的な項目

- 温かく優しい声で話しかける
- スキンシップをとる
- 子どもが求めることに応える
- やりたがることに取り組める環境を用意する

＊応答的養育態度３群：「温かく優しい声で話しかける」「スキンシップをとる」「子どもが求めることに応える」「何かうまくできたときに一緒に喜ぶ」「何かをやろうとしているときは手を出さずに最後まで見守る（危ないことは除く）」「やりたがることに取り組める環境を用意する」「興味が広がるような遊びや体験を用意する」の７項目を得点化して足し上げ、分布をもとになるべく均等に高群・中群・低群の３群に分割。
＊レジリエンス得点：レジリエンスにかかわる 17 項目（PMK-CYRM-R 尺度を使用、「まったくあてはまらない」１点～「とてもあてはまる」５点）を合計して、項目数で割った数値（1 ～ 5 点に分布）。

＊本調査は、５歳の子どもがいる母親を対象として実施し、母親による影響を調べている。父親を含むほかの保護者への調査は実施していない。

「子どもの生活に関するアジア８か国調査 2021」調査概要

調査の実施者：チャイルド・リサーチ・ネット
調査のテーマ：アジア諸国にみる「ハッピー＆レジリエントな子どもをどう育むか」
調 査 対 象：アジア８か国（日本、中国、フィリピン、マレーシア、台湾、インドネシア、シンガポール、タイ）の都市部および近郊に住む、５歳（園児）の子どもがいる母親全 1,973 人
調 査 項 目：子どものレジリエンス／子どものウェルビーイング／母親の養育態度・子育て意識／母親の生活満足度／園（保育者）のサポート／母親の家事育児分担率／配偶者サポート／子どものデジタルメディア活用実態／デジタルメディア活用時の母親のかかわり／子どもの日常的な時間の使い方／子どもの遊びの状況／コロナにかかわる状況 など
調 査 時 期：2021 年８月～ 11 月
調 査 方 法：アンケート調査（オンライン／質問紙）

https://www.blog.crn.or.jp/crna-research-activities.html

調査内容を詳しく知りたい方は、こちらからアクセスしてください。▶▶▶

子育て肯定感」「③園（保育者）のサポート」「④デジタルメディア使用時の母親のサポート」「⑤遊ぶことができる友達の数」が有意に関連していることがわかりました。そして、母親の応答的養育態度では「温かく優しい声で話しかける」「スキンシップをとる」など（図1）、園（保育者）のサポートでは「保育者は子どものことを気にかけてくれている」など（図2）の度合いが、子どものレジリエンスの育成に関連していることがわかりました。家庭とともに園もまた、子どものレジリエンスを育む大切な要素となっているのです。

豊かな人間関係に囲まれて安心して過ごせる環境づくりを

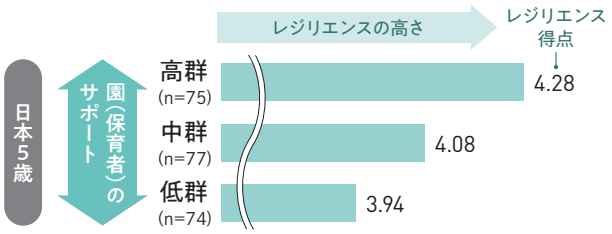
レジリエンスは、身につけた姿が表面的には見えない力です。そうした力を育むために、園としてどのようなサポートができるのでしょうか。

ヒントになるのは本調査の尺度とした「レジリエンス獲得を支える生育環境」（図3）です。レジリエンスを獲得した子どもが育った環境を示すもので、これを見ると「公平さが担保される自分の居場所がある」「自分は見守られていて、いつでも助けてもらえる」などの環境が大切であることがわかります。園にそうした環境を整えることで、子どもにレジリエンスが育っていく姿が明確には見えなくても、保険のようにいざというときに役立つと考えることができます。困難に対応する力の育成というと、あえて我慢を強いるような経験を考えがちですが、そうしたものはレジリエンスの獲得には無関係なのです。また、保護者にレジリエンスの大切さを伝えることも、園の重要な役割になるでしょう。

今回の調査から、園で友だちや保育者などに囲まれて温かな時間を過ごすことが、レジリエンスの育成に関連することがわかりました。これからも子どもが安心感を抱き、自分に自信をもてるようなサポートに努めていただきたいと思います。

図2 レジリエンスの育成に効果的な園（保育者）のかかわり

● 園（保育者）のサポートの度合いが高いほど、子どものレジリエンス得点は高い



子どものレジリエンス育成に特に効果的な項目
- 保育者／先生は子どものことを気にかけてくれている
- 子育てについて相談できる保育者／先生がいる

＊園（保育者）のサポート３群：「保育者／先生の子どもへの言葉かけやかかわり方が温かい」「保育者／先生は子どもの気持ちを尊重している」「保育者／先生は子どものことを気にかけてくれている」「保育者／先生はあなた（母親）のことを気にかけてくれている」「子育てについて相談できる保育者／先生がいる」の５項目を得点化して足し上げ、分布をもとになるべく均等に高群・中群・低群の３群に分割。
＊レジリエンス得点：図１と同様の手順で算出。

図3 レジリエンス獲得を支える生育環境（抜粋）

※調査に用いたレジリエンスにかかわる 17 項目の尺度より、園のサポートに関係する項目を抜粋。「養育者」を「保育者」としてご覧ください。

- ◎あなたの子どもは教育を受けることや園／学校でうまくやっていくことが重要であると信じている
- ◎あなたの子どもがどこにいて、大抵の時間、何をしているのかを知っている親／養育者がいる
- ◎あなたの子どものことをよく分かっている親／養育者がいる
- ◎あなたの子どもは自分の気持ちについて家族／養育者に話す
- ◎あなたの子どもは、自分が園／学校に溶け込めていると感じているようだ
- ◎あなたの子どもにはつらいときに気にかけてくれる家族／養育者がいる
- ◎あなたの子どもは公平に扱われている
- ◎あなたの子どもは家族／養育者と一緒にいると安心するようだ
- ◎あなたの子どもは、家族／養育者との季節の行事などの楽しみ方が好きである

データ紹介

「第６回 幼児の生活アンケート」（2022年3月実施）より

個々の家庭の状況を受け止め、子育ての喜びを味わえる子育て支援・保護者支援の充実を

ベネッセ教育総合研究所では、乳幼児の生活の様子や保護者の子育てに関する意識と実態を調査する「幼児の生活アンケート」を、1995年から約５年ごとに実施しています。第６回（2022年）は、新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）の感染拡大や社会環境の変化が子どもや保護者の生活や意識の変化に関連していることが示唆される結果となりました。本調査の第１回からの協力者である東京家政大学大学院客員教授の佐藤暁子先生にお話をうかがいました。

佐藤暁子先生（さとう・あきこ）

東京家政大学大学院客員教授。東京都公立幼稚園に40年間勤務した後、玉川大学、東京家政大学児童学科で乳幼児教育、子育て支援、保育内容総論などを指導し、保育者の育成に尽力。東京家政大学附属みどりケ丘幼稚園長、ナースリールーム所長などを歴任。

コロナ禍や社会環境の変化の影響を受けて保育を取り巻く環境が大きく変化

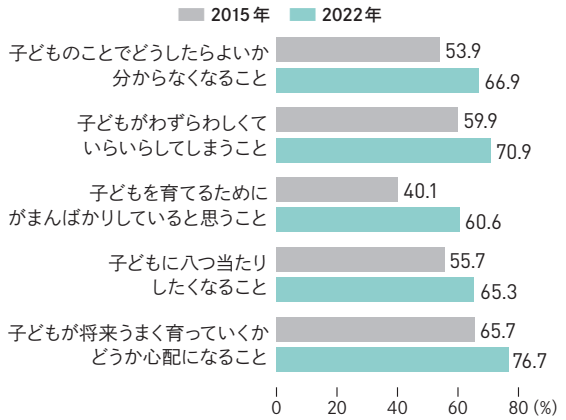
コロナの感染拡大を始めとする子育て世帯を取り巻く環境変化により、今回の調査結果は、これまでと比較しても、多くの項目で変化が見られます。ここでは、園の先生方が子どもや保護者の実態を捉えて、With/After コロナ時代の保育や保護者支援を考える際に役立つと思われるデータを抜粋してご紹介します。

調査結果を見る前に、私がかかわっている園の様子から、保育現場の変化を押さえておきましょう。園では、感染拡大期に休園や時間調整を余儀なくされるとともに、登園再開後も行事の中止や縮小、できるだけ「密」を避けるための保育内容の変更など、さまざまな対応を迫られています。手洗い・うがい・消毒の励行やマスクの着用が習慣化するなど、生活様式も大きく変化しました。

それにより保育やコミュニケーションのあり方が大きく変わり、子どもや保護者にも影響を及ぼしています。例えば昼食は、子どもがおしゃべりをしてコミュニケーションを楽しむ時間でしたが、今では「黙食」が当たり前の光景となっています。

またコロナの感染拡大期から、保護者と保育者、保護者同士が直接対面して情報を交換する機会が著しく減少し、家庭が孤立しやすい状況が強まっています。保護者は、子どもや自身の健康状態に

図1 子育てへの否定的感情



※数値は、「よくある」「ときどきある」の合計％。

「幼児の生活アンケート」調査概要

調査の実施者：ベネッセ教育総合研究所
調査のテーマ：乳幼児の生活の様子、保護者の子育てに関する意識と実態
調査項目：子どもの基本的な生活時間／習い事／メディアとのかかわり／遊び／母親の教育観・子育て観／子育てで力を入れていること／母親の子育て意識／夫婦の家事・子育て分担／子育て支援など

◎第６回調査
調査時期：2022 年 3 月
調査方法：WEB 調査法
調査対象者：首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の０歳６か月～６歳就学前の乳幼児をもつ母親 4,030 人

◎第５回調査
調査時期：2015 年 2 ～ 3 月
調査方法：郵送法
調査対象者：首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の０歳６か月～６歳就学前の乳幼児をもつ保護者 4,034 人

※1歳6か月以上の幼児をもつ母親の回答のみを分析している。
※第６回は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、2022 年に実施。３月は対象地の首都圏において緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の期間ではなかったが、再度の感染拡大が懸念される時期であった。

第１～６回の調査概要は、ウェブサイトでご確認ください。

ベネッセ教育総合研究所「第６回 幼児の生活アンケート」ウェブサイト
https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=5803

敏感になり、不安を抱きやすい心理状態にあると感じます。

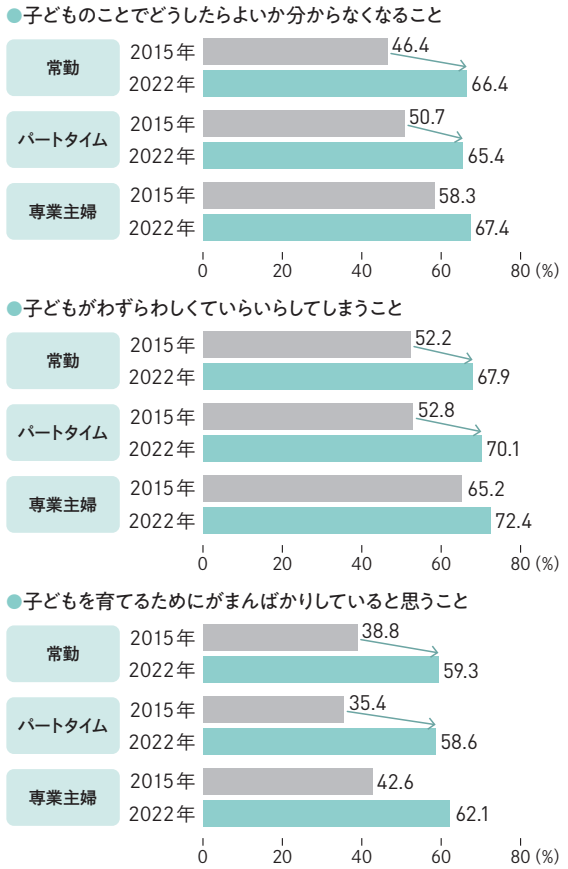
このようにコロナは、保育を取り巻く環境、子どもの生活や活動、家族の精神面など、さまざまな側面に影響を与えているのです。

社会環境の変化などを背景に子育てへの否定的感情が増加

私が今回の調査で大変気になったのは、前回の2015 年調査と比較して、母親の子育てへの否定的感情の割合が増えていることです。「子どものことでどうしたらよいかわからなくなる」「子どもがわずらわしくていらいらしてしまう」「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う」など、すべての項目において否定的感情が増加しています（図1）。

その要因の１つに、コロナによる生活の変化が挙げられると思います。感染拡大期は、子どもは屋外に出かけづらく、家にこもりがちな状況になりました。一方で、リモート勤務や休業になる保護者も多く、そのよい面としては、親子が一緒に過ごす時間が増えて子どもとじっくり向き合える機会になったと思います。半面、ふだんは気づかなかったり、深く考えていなかったりした子どもの気になる点などを直視せざるをえなくなり、「うまく育てられていないのでは」「どうしたらよいかわからない」といった否定的感情につながったことが考えられます。

図2 子育てへの否定的感情（母親の就業別）



※数値は、「よくある」「ときどきある」の合計％。

背景には、家庭の孤立もありそうです。以前は、子どもの送迎や行事、保護者会などのときに、保育者やほかの保護者と雑談をして情報を得たり、子育ての悩みを打ち明けたりする場が多くありましたが、それらがコロナによって失われました。さらに感染拡大防止の観点から祖父母などにも会

いづらくなり、子育てを手伝ってもらったり、相談したりすることが難しくなりました。そうした社会環境の変化により、母親が悩みを抱え込みやすくなっているのではないでしょうか。

多くの園では、コロナの感染が拡大する中で、子どもや保護者をサポートするために、園だよりなどの頻度や内容を充実させたり、ICTを活用して動画の配信やオンライン保護者会を実施したりなど、情報発信のあり方を工夫してきました。それらはとてもよい取り組みですが、一方で子育ての悩みは一人ひとりで異なるため、やはり対面で個別に話を聞くことでしか解決できないケースも多いものです。園として、個々の保護者の状況を理解し、気持ちを受け止めて、支援していくことが大切だと考えています。

仕事の有無にかかわらず母親は自分の生き方を模索

続いて、母親を「常勤」「パートタイム」「専業主婦」に分けたときに、否定的感情が各層でどのように変化しているかを見てみましょう（P.19 図2）。いずれの感情ももっとも高いのは「専業主婦」ですが、特に「常勤」「パートタイム」で増加率が高まっていることが見てとれます。

仕事をもつ母親の否定的感情が2015年から増加した要因としては、コロナ禍で外部からのサポートが受けづらい中、仕事をしながら子育てをする難しさに直面していることが考えられます。一方で、専業主婦の否定的感情が常に高く、今回さらに増加したのは、子どもと1対1で向き合う時間がより長くなり、気分転換をする機会も限られてしまったことなどが要因でしょう。

では、母親の子育て観は、2015年から2022年の間でどのように変化しているのでしょうか。「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」という「バランス重視」と、「子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」という「子育て重視」の比率を見ると、「バランス重視」が10.2ポイント増加していることがわかります（図3）。さらに各層の増加率を比べると、特に「専業主婦」で高くなっています（図4）。

図3 子育て観：子育てと自分の生き方のバランス

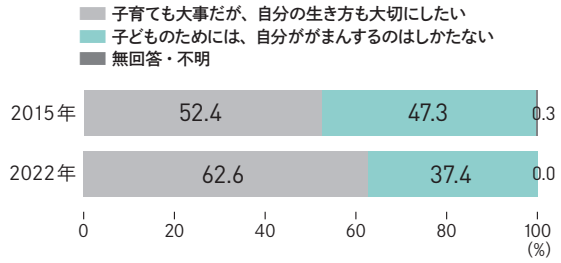
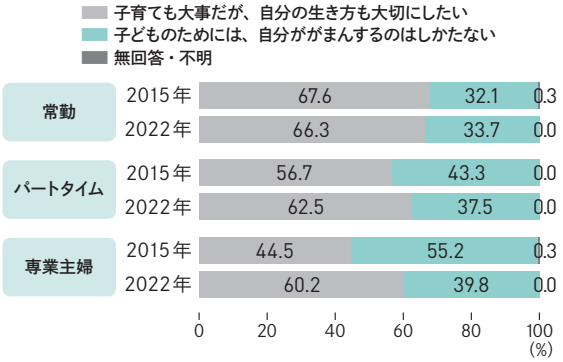


図4 子育て観：子育てと自分の生き方のバランス（母親の就業別）



2019年の「幼児教育・保育の無償化」の導入、仕事をもつ母親の増加、SNSの普及などにより、多様な生活スタイルや価値観が可視化され、受け入れられるようになったことで、「子どもが幼いうちは子育てに専念する」という、ある種の固定観念から抜け出して、子育てとともに自分らしい生き方も追い求めたいと考える母親が増えていることがうかがえます。そうした考えは、以前は仕事をもつ母親に多く見られましたが、次第に「専業主婦」にも広まりつつあるようです。

保護者の状況を把握し支援のできる園をつくる

次に、調査結果から母親の園に対する要望の変化を確認して、今求められている保育や保護者支援について考えていきましょう。注目してほしいのは、ほとんどの項目において、園への要望が高まっていることです（図5）。これは、いくつかの

要因が複合した結果と考えています。

まず前述の通り仕事をもつ母親が増えたことで、以前より子育てに時間や労力を割けなくなり、園に任せたいと考えるようになっていることが推測できます。

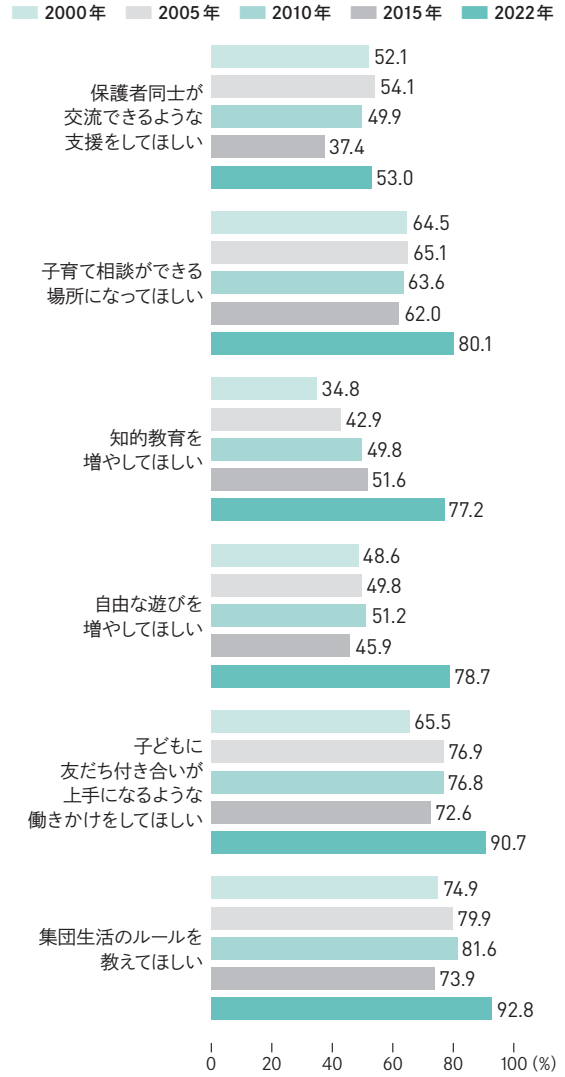
また、幼児期の保育の重要性がさまざまなメディアなどで報道されるようになったことを受け、園の教育や機能をより充実させてほしいという要望が強まっていることが挙げられます。「知的教育」を望む声が増えていることは、その表れといえそうです。ただし、「自由な遊び」を望む声も同様に増えており、文部科学省の「幼保小の架け橋プログラム」などでも、幼児期の遊びの大切さが見直される状況にあることを踏まえると、ここに関しては注意が必要になるでしょう。

なお、グラフは割愛しますが、「常勤」「パートタイム」「専業主婦」の各層を比べると、特に「専業主婦」で園への要望が高まっていることがわかりました。この結果を先ほど紹介した、「専業主婦」の意識変化と関連づけて考えると、子育てを1人で抱え込まず、これまで以上に園の協力を得て、自分の時間も大切にしたいと考える母親像が浮かび上がります。仕事をもつ母親への社会的な支援は少しずつ手厚くなっていますが、そうしたものが「専業主婦」には届きづらかったということを、考えていく必要がありそうです。

今まで見てきた状況を受け、園では次のような支援ができると思います。まず保護者とのよい関係性を築くために、園の方針や月々の保育の様子をよりきめ細やかに発信していきましょう。そして、だれもが気軽に相談できる組織風土やしくみをつくり、個々の保護者の悩みに応えていきましょう。その際、守秘義務を負っていることは忘れてはなりません。さらに、園庭開放などを通して、保護者同士や、保護者と保育者との交流を促進していきましょう。

子どもを真ん中に、園と保護者が子育てについて語り合い、受け止め合いながら、地域の保育の拠点となることが、これからの園に求められる役割だと考えます。

図5 園に対する保護者の要望



※数値は、「とてもそう思う」「まあそう思う」の合計％。

刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

「これからの幼児教育」バックナンバー

2022 春 | 特集 | 園長を軸に考える若手保育者の採用と定着

2021 秋 | 特集 | すこやかな育ちを守る危機管理の考え方

2021 春 | 特集 | 新しい園づくりに向けた第一歩

※最新号、バックナンバー等の追加発送は行っておりません。

◎WEBサイトから、すべての記事を無料で閲覧・ダウンロードいただけます。

ベネッセ　これからの幼児教育　検索

https://berd.benesse.jp/magazine/en/backnumber/

これからの幼児教育 2022 Winter | 2022年12月1日発行　編集発行人 西村俊彦　発行所 (株)ベネッセコーポレーション
©Benesse Corporation 2022

Benesse
「これからの幼児教育」お問い合わせ窓口
〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17　TEL.0120-926-610（通話料無料）　受付時間／9:00～18:00（土日・祝日・年末年始除く）
※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、TEL.086-214-6301へおかけください（ただし通話料がかかります）。

2PL056-03